

短期大学生による書き言葉の問題点

野呂健一

高田短期大学キャリア育成学科

1. はじめに

筆者は、高田短期大学で日本語表現等の授業を担当しており、学生が書いた文章に触れる機会が多い。授業では、話し言葉と書き言葉の違いについても指導している。授業でのレポートや就職活動でのエントリーシート等で文章を書く際には、普段の言葉遣いではなく改まった表現で作成することが求められるため、学生は話し言葉と書き言葉を使い分ける必要性については十分認識しているものと思われる。しかし、これまでの授業等において学生が書いた文章には、文章表現上のさまざまな問題点が見られる。それらの問題点の中には、現在刊行されている日本語表現教科書等で指摘されていないものもある。本研究では、学生が書いた作文から、文章表現上問題のあるものを抽出し、これまで指摘されることが少なかった問題点を取り上げ検討する。

2. 先行研究

山下（2018）は、大学生のレポートにおける話し言葉の出現を探るため、レポートの書き方に関する書籍で扱われる話し言葉を一覧表にまとめ、授業で課したレポートから出現数を調査している。その結果、「じゃあ」「超」「～ちゃった」「わかんない」など口語としての話し言葉は全く出現していないため、ある程度は話し言葉と書き言葉の区別は身につけているとは言えるものの、明らかな傾向性が見えたわけではないとしている。しかし、山下（2018）も指摘するように、関連書籍で取り上げられた話し言葉に限定して調査を行っているため、それ以外の話し言葉が抽出されていない。そのため、山下（2018）が一覧表にまとめた話し言葉以外に、大学生のレポートで問題となる話し言葉が使用されていることは否定できない。

3. 調査概要

高田短期大学キャリア育成学科 2018 年度後期開講科目である「文書技法」初回授業後に、「私の好きな言葉」というタイトルで 500 字の作文課題を課したところ、40 名の学生が提出した。その中で、山下（2018）がまとめた、「「レポートの書き方」関連書籍における話し言葉一覧」に挙げられている話し言葉の使用状況を確認したところ、表 1 のとおりであった。

表1 使用された話し言葉

接続表現									
なので	2	でも	3	～し	2	～けど	1	そして	1
副詞表現									
とても	10	もっと	1	どんどん	1				
その他									
～とか	1	～れる (ら抜き)	1						

今回調査の作文を提出した「文書技法」受講の学生は、前期に必修科目「日本語表現」を履修しており、その中でも、話し言葉と書き言葉の違いについて学んできている。したがって、全般的に使用された話し言葉の数は少なく、山下（2018）の調査と同様に、明らかにくだけた表現は用いられていない。その中でも、やや目立つのは、強意の副詞「とても」であり、40名中10名の学生が使用していた。石井（2011）などで、「とても」は話し言葉であり、レポート等では「非常に」がふさわしいとされているが、同じ表1の副詞表現「もっと」「どんどん」と比べると、くだけた表現であるという意識が低いと考えられる。レポート等のような常体で書かれた文章にはふさわしくないかもしれないが、敬体の文章であれば違和感は少ないであろう。

表1に挙げた表現のほかに、今回の調査で気になる表現が2つある。1つは一人称代名詞「私」の過剰使用である。40名中18名の作文に観察された。

- (1) また、私が家族や友人から「尊敬しているよ」と言われた時は、とても嬉しく思い、私も尊敬してくれている人に対しては、できる限りのことをして、相手との交友関係を良好なものにしたいと考えます。

これは、「私の好きな言葉」について述べた後の1文である。文脈から主語が「私」であることは明らかであるのに、1文中に「私」が2回用いられている。少なくとも1つめの「私が」は不要である。

もう1つは、引用節の中に用いる終助詞「な」である。40名中6名の作文に観察された。

- (2) こんな素敵な言葉をきちんと気持ちを込めて相手の人に言える人間になりたいなと心から思いました。

「になりたいと心から思います」で十分であるところに、終助詞「な」をつけることによって、幼い印象の文となってしまう。

これらの2つの問題点については、次章で詳細に検討する。そのほかに、以下のような問題のある表現が見られた。

①主語・述語の不对応 5名

「日本語表現」の授業において、繰り返し指導していたため、主語と述語が対応していない文を書いた学生はそれほど多くなかった。

(3) 私がこの言葉を選んだ理由は、例えば、自分が相手のために何か行動をした時、どれだけ大変な仕事でも、「ありがとう」と言われるととても気分が良くなります。

(4) この言葉は高校を卒業して半年経った今でも印象に残っている言葉です。

(3)のように、1文が長くなると、冒頭の主語と文末の述語が対応しない文が表れやすくなる。(4)は、主語・述語の不对応のほか、言葉の重複という問題も含まれている。

②文体の混在 4名

レポート・論文は不特定多数の読み手を対象とするため、常体（だ・である体）で書かれることが一般的であるが、今回の調査対象は、授業の提出課題としての作文であるため、敬体（です・ます体）で書いた学生がほとんどであった。授業では、常体と敬体どちらかに統一することとし、混在させてはいけないことを繰り返し指導している。

③「～のだ」の過剰使用 2名

文体の選択と関係する問題であるが、常体（だ・である体）に統一する場合、名詞文・形容動詞文の場合には文末が「だ・である」となるのに対し、動詞文・形容詞文の場合には「だ・である」を用いず動詞・形容詞の言い切りの形になる。

(5) 京都は古い町だ／である。＜名詞文＞

(6) 明日京都へ行く。＜動詞文＞

学生の中には、「だ・である体」で書く場合には、動詞文・形容詞文にも「だ・である」をつけなければならないと考えている者がいるようである。動詞文・形容詞文に「だ・である」をつけようとするとなら「～のだ・である」となってしまう。(7)は、学生の作文からの例である。

(7) 私の好きな言葉は、「ありがとう」だ。生活をしている中で1日1回は口にする言葉だと思う。

小さな子供から大人まで全ての人が使っている言葉でもあるのだ。

清水他編（2011）は、「のだ」文について、「自分の考えや主張を相手に強く示したいという、主観性の強い表現」であるため、多用すると、「主観の強い断定的で独善的な主張に陥ってしまう」と述べている。動詞文・形容詞文の「だ・である体」は言い切りの形であること、および、「のだ」「のである」を

使わなくても文意が通じる場合には、使わないように指導する必要がある。

④体言止め 1名

体言止めを作文中に用いていた学生は1名のみであった。限られた文字数の中で多くの情報を伝えることが求められる新聞記事などでは、体言止めが頻繁に用いられるが、一般文章ではニュアンスが伝わりにくくなるため、用いるべきではないと指導している。

本章では、学生の作文において観察された話し言葉について概観した。山下(2018)の「「レポートの書き方」関連書籍における話し言葉一覧」に挙げられている話し言葉は、強意の副詞「とても」以外には、ほとんど使われていないことが分かった。しかし、今回の調査で学生の作文を読んでいると、「レポートの書き方」関連書籍に取り上げられていないが、改まった文章では違和感のある表現が2つ見られた。次章でそれらの表現について考察する。

4. 問題となる表現

4.1 「私」の過剰使用

石井(2001)では、「私(たち)は」は口語表現であり、論文では「筆者(ら)は」がふさわしいとされている。しかし、「私(たち)は」はくだけた表現というわけではなく、敬体で書かれた文章では自然に用いられる。したがって、「私(たち)は」を、表1に挙げた表現と同様に、改まって文章で避けるべき表現とすることはできない。

一方、一般向けに書かれた文章作法の書籍やWebサイトでは、主語を明確にするようにという記述がされていることがある。外岡(2012)は、「主語やしばしば文章を明快にするうえで、とても重要な役割を果たします。主語がわかりにくくなると、論旨や意味が不透明になってしまいがちです」(p.29)と述べている。

しかし、高橋(2008)が、以下のような例を挙げ、「文脈から明らかな場合は日本語の主語は現れない」(同書:107)と指摘するように、英語等と異なり、日本語の文において、主語は必須の成分ではない。(8)および(9)の第二文において「私は」が明示されないのは、文脈から明らかであるからである。

(8) 坂道を走った息切れと驚きとで、(私は) ‘ありがとう’ という言葉が咽にひっかかって出なかったのだ(同書:108)。

(9) 大島と聞くと私は一層詩を感じて、また踊子の美しい髪を眺めた。(私は)大島のことをいろいろ訊ねた(同書:108)。

今回調査した学生の作文においては、40名中18名の学生の作文に、「私」の過剰使用と考えられる表現が観察された。以下にいくつかの例を抜粋する。

(10) しかし、自分を越えなければずっとこのままで終わってしまうと思い私は、その問題に取り組みました。

(11) 私は、ありがとうと言われて嫌な気持ちになる人はいないと思います。

(12) なぜ私が「ありがとう」が好きかと言うと理由は2つある。

いずれも先行文脈及び作文のテーマが「私の好きな言葉」であることから、主語が「私」であることは明白である。(10)を「自分を越えなければずっとこのままで終わってしまうと思い、…」としても全く問題はない。(11)についても、この文が作文冒頭の1文であればまだしも、文章途中の1文なので、「私」を明示する必要性は薄い。(12)も、私の好きな言葉が「ありがとう」であるという前文に続く部分なので、「私」がなくてよいであろう。

推測であるが、これまでの作文教育において主語をはっきりさせるように指導されてきているのではないだろうか。そのため、学生は作文を書く際に、意識的に、あるいは、無意識のうちに文には必ず主語を入れるようにしているのだと考えられる。しかし、前述したように、文脈から明らかな場合、日本語では主語を表示しないことが一般的である。書き手自身が主語であることが明らかであるのに、「私」が繰り返されると冗長さや幼さを感じさせる文章となってしまう。レポートや論文では、「私」を「筆者」に置き換えるのが一般的だが、作文等の場合、自分のことを指すことが明らかな場合は、「私」を省略したほうが自然な日本語の文章になることを指導するべきである。

4.2 引用節における終助詞「な」の使用

日本語記述文法研究会編(2008)が指摘するように、思考を表す動詞を伴う引用節の中には、疑問や祈願などさまざまな文のタイプが現れる。

(13) 犯人は本当に1人だったのかと考えた。(疑問)

(14) 12月になると、そろそろ雪が降らないかなあと思う。(祈願) (以上2例 同書: 29)

学生の作文において観察されたのは、次の例のように、引用節において、終助詞「な」が用いられたものである。

(15) こんな素敵な言葉をきちんと気持ちを込めて相手の人に言える人間になりたいなと心から思いました。(=2)

日本語記述文法研究会編(2003)は、このような終助詞「な」について、非対話的な性質を強くもつものであり、認識の状態を反映したり、詠嘆を表す機能をもつと述べている。

(16) あ、だれか来たな。

(17) 雨が降ってるな。傘、持ってでかけなくちゃ。(以上2例 同書: 262)

いずれの例においても、聞き手に対して話しかけるというより、独り言として発話されていると感じられる。(15)の場合、文末が敬体になっていることから、相手(この場合、読み手)を意識しているため、非対話的性質を持つ終助詞「な」との共起が不自然となるが、終助詞「な」を削除してみると自然な表現となる。

(18) こんな素敵な言葉をきちんと気持ちを込めて相手の人に言える人間になりたいと心から思いました。

学生の作文で書かれた例をいくつか挙げる。

(19) そう考えると、本当に大切な言葉なんだなと感じることができます。

(20) アルバイトでも接客をしてお客様に「ありがとう」と言われるとしていて良かったなと思います。

(21) また、「ありがとう」って本当にいい言葉だなと改めて感じました。

(22) だから、「ありがとう」という言葉は魔法の言葉なのかなと私は思います。

(19)～(21)の例では、終助詞「な」を削除すれば、作文として適切な言葉遣いとなる(ただし、(19)では「言葉なんだ」と撥音化しているため、「言葉なのだ」とするほうがよい)。(22)では、疑問の助詞「か」と結びつき、「かな」で自問を表す形式となっている。やはり、口語的でくだけた印象を与える表現であるため、「～だろうか」とするほうが適切である。

このような表現が用いられる原因として、終助詞「な」が非対話的性質を持つということから、相手に伝えるという意識が低いことが考えられる。そのため、確かに授業の提出課題であるため、読み手の存在が希薄であるが、教員に読んでもらうためのものである。日記のように自分自身に向けて書くものを除いて、ほとんどの文章には読み手が存在する。今後、読み手の存在を意識して文章を書くように指導する必要がある。

5. まとめ

本稿では、短期大学生に課した作文課題に見られる問題点について、話し言葉の使用を中心に考察した。レポートの書き方に関する書籍で指摘されているようなくだけた表現については、強意の副詞「とても」以外にはそれほど使用されていないことが分かった。一方、レポートの書き方に関する書籍に取り上げられていないが、改まった文章では違和感のある表現として、「私」の過剰使用と引用節における終助詞「な」の使用という2点が浮かび上がった。

1つ目の問題点について、日本語では、文脈から明らかな場合には主語を明示しないことが一般的で

あるため、「私」が繰り返し使われると冗長さや幼さを感じさせる文章となってしまう。これまでの作文教育の影響等によって作文を書く際に、意識的に、あるいは、無意識のうちに文には必ず主語を入れるようにしているのではないかと考えられる。

2 つめの問題点について、思考を表わす動詞を伴う引用節内に終助詞「な」を用いる学生が少なからず存在する。非対話的性質を持つ「な」が用いられていることは、読み手に伝えるための文章であることが意識されていないことを示すと言える。

本稿では、書籍等で取り上げられた話し言葉に限定して調査を行った先行研究では浮かび上がってこなかった問題点を指摘することができた。実際に書かれた文章を調査の出発点とすることが有効であることが確認できたのではないかと考えられる。

【引用文献】

石井一成 (2011) 『ゼロからわかる大学生のためのレポート・論文の書き方』 ナツメ社

清水明美・岩沢正子・加藤清・武田明子・福沢健編『Practical 日本語 文章表現編—成功する型— 改訂版』おうふう

外岡秀俊 (2012) 『「伝わる文章」が書ける作文の技術—名文記者が教える 65 のコツ』朝日新聞出版

高橋道子 (2008) 「日本語の主語はなぜ現れにくいのか—社会文化的要因としての「世間」」『日本女子大学英米文学研究』43号, pp. 103-117

日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法4 第8部モダリティ』くろしお出版

日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法6 第11部複文』くろしお出版

山下由美子 (2018) 「学生のレポートにおける話し言葉とその出現傾向」『日本語日本文学』28号, pp. 57-71, 創価大学日本語日本文学会